

三 口説およびその他の民謡

(一) 数え歌

- 1 一つとせ 人の心も 和かに
すくすく 伸びゆく 沖永良部
- 2 一つとせ 二つの町に 分かれても
心は一つに 結ばれて
- 3 一つとせ 港は 和泊小米港
宝と文化が 出入する
- 4 一つとせ 世の主神社は 城の跡
永良部の 歴史を物語る
- 5 一つとせ 偉人西郷南洲の
遺訓で 教育盛り上げる

- 6 一つとせ 昔をしのぶ 昇竜洞
観光お客で 賑いぬ

- 7 一つとせ 名高きエラブの 白百合は
はるばる海越え アメリカへ

- 8 一つとせ やれやれ空港もできました
互にニコニコ 空の旅

- 9 一つとせ 暮しは豊かに 気は楽に
二万同胞 皆栄え

- 10 一つとせ 尊い祖先の 遺志ついで
育て守らん 沖永良部

(二) 和泊村ママ口説

- 1 水ぬ豊しやは和ぬ村 人ぬ集ゆし和泊村
頭高さは手々知名村

2 ウデイぬ出来ゆしは喜美留村 遊女ぬ出じゆし国頭村 魚ぬ取りゆし出花・西原

3 泊ぬ美らさは伊延村 水ぬタドウナサや畦布村 言葉ぬ固さは根折村

4 山に囲まゆし永嶺・瀬名 ユビに抱かゆし 田舎平・後蘭 支度美らさは内城

5 砂糖ぬ出来ゆしは玉城村 糸ぬ出来ゆしは大城 莫産ぬ出来ゆしは皆川・古里

(三) 全島口説

真塩ぬ出し元国頭村 魚ぬ取りゆし西原村よ 海老ぬ取りゆし出花ぬ村 章魚シーガイ取りゆし 喜美留村 米ぬ寄合ゆし和泊村 村ぬ離りは和ぬ 村 砂糖ぬ豊さは玉城村 莫産ぬ出じゆし皆川・古里 糸ぬ出来ゆし余多村 島ぬ高さや上平川 村 水ぬ豊さや屋者村

に 錦糸衣は 外側ぬ飾い 心磨ちユしどウ 人ぬ価値

ほ ほたる集みてイどウ すぐり者なたる ランプ昼なちユてイ 油断するな

へ 下手ぬくせからどウ 吾が自慢しゆる たしなみぬ有しは 人ぬ下から

と 時ぬ鐘守り 目うちする間む 時は世ぬ中ぬ 宝でイむぬ

ち 畜生鳥さえむ 心あてイさらみ いちむ朝方ぬ 時ゆ守てイ

り りんき口ぐとウや 足らぬ故からどウ 満ちてイあーぬハミは 音はねさみ

ぬ 糖味噌や吾家ぬ しユてぬ神でイむぬ 潮がらさあーしは 潮とウ思り

言葉汚さや芦清良村 物事ぬスラベや黒貫村 衣裳ぬ卑しヤや瀬利覚よ 髪結い美らさ知名村 人ぬ太さや屋子母村 交際てイ良さや徳時村 女童浅さや馬島尻 村ぬ太さや田皆村 着物ぬ美らさや上城村 田に抱かゆし田舎平・後蘭 山に抱かゆし永嶺・瀬名 谷にうさゆし内城 島ぬスズリや根皿村 溜地ぬ豊さや根折村 根性汚ささ畦布村 港ぬ良さや伊延村

(四) いろは歌

手々知名 玉江柳曹作詞

い 生きちうる間ぬ 世ぬ中ゆとウ思てイ 後ぬ世に残る 沙汰やちヤすが

ろ ローソクぬあかり 芯からどウ照らす 外は流りてイむ 心ひかてイ

は 恥じ知らぬ者は 馬牛ぬ類 たとウい人並ぬ 姿やてイむ

を 女やくさみは 古桶ぬ類 朝夕帯しみてイ ただち使り

わ 吾が悪さ思てイ 首さぎてイうりば 敵ぬ弓ぬ矢む 的はねさみ

か 片時む他人に 心許すなよ 親とウ子ぬ外は 敵とウ思り

よ 他所ぬ上む吾上む 変わる事ねさみ 吾が身ちでイ他人ぬ 痛さ知りよ

た たとい他人交際や鬼ぬ事やてイむ ひろてイ仲なりや 吾親心

れ 礼儀正しきは 人ぬ水鏡 善し悪しぬ影は すぐにくつてイ

そ 外親とウ吾親ぬ 変わるぐとウねさみ

親かなしヤしユーしどウ 吾身むかなしヤ

つ つつしみぬ有しどウ 人ぬ上なゆる

わがままぬはてや 人ぬ目下

ね ねうちなぬ者は 道はため小石

道ぬゆきかいぬ じゃまになゆり

な なんぎ苦しみは うでみがく砥石

とウぎやとウぐほどこに 光いじてイ

ら 楽するな童 ふゆするな若さ

年寄てイぬ末は 哀りてイむぬ

む 虫は口からどウ 錦糸はちユる

人は口からどウ 悪くとウはちユさ

う 落とウしちヤしするな 米一粒あてイむ

額から落とウす 汗ぬ真玉

ふ ふかぶちぬ底は 足下ぬゆやみ

一足あやまりや 地獄さらみ

こ 公事御用仕事 思みはまてイしユーしどウ

誠善かい人ぬ しるしてイむぬ

え 枝葉さかりゆる 吾家ぬよろこびぬ

根元親ふじぬ うかぎでイむぬ

て 天は君がなし 親は神がなし

子孫末までイむ あおじ拌み

あ 朝夕伏し拝でイ あきたらぬむぬは

君とウ吾が親ぬ 御恩さらみ

さ さやか照る月は 善かい人ぬ心

心美らしきどウ 世間照らす

き 肝心いらでイ 友いらでイ交ちヨリ

ゐ 座りは座り長さ 立てイや立ち長さ

ゆらりほーりしユーしは 人ぬはずれ

の のさばゆぬ者に ゆかい人はねさみ

やりこ着ち美らさ 身むち美らさ

お 親兄弟ぬかなしヤ 朝夕うち笑てイ

一人たしきたしき 浮世わたり

く 口ぬ故からどウ 世間さわがしユる

一口から十口 限りねさみ

や やみじふみわきてイ 浮世わたゆしむ

吾ぬなろちたべぬ 師匠ぬ御恩

ま 誠 眞実は 神様ぬ心

誠守ゆしどウ 神む守る

け けん高さなまさ 足らぬ沙汰さらみ

稲ぬ穂ぬ美らさ ま首たりてイ

ゆ 許ち許さらぬ 神ぬ罪とがは

親不孝なゆる 罪でイむぬ

め 目ぬ前ぬ欲に 心まよわすな

目ぬ上ぬ糸は 痛さとウ思り

み 見なれ聞なれや 学問にまさてイ

善かい人ぬ行い 見ちやや聞ちやや

し 死にユぬあかとウちぬ 善し悪しぬ沙汰は

生き恥にまさる 恥とウ思り

ゑ へに通じ省略

ひ 人ぬ上見ちユてイ 吾が身ひきしみり

ひきしめぬあーしどウ 人ぬ手本

も 物始末しユーしどウ 物不始末しユーしは

人ぬ善し悪しぬ 見本さらみ

世間沙汰波は 吾が悪さぬ故からどウ
底深さありば 音ぬ立ちユミ

す 澄水ぬ如く 吾が心澄まし
にぐりゆぬ水に 月ぬ照ゆみ

この歌は、手々知名の「遊び踊り」の歌詞として、大正三年九月に作詞されたという。

昭和四十三年に刊行された「沖永良部島郷土史資料」および昭和四十九年に和泊町中央公民館が発刊した「沖永良部島民謡集」では、「玉江柳曹作詞」とそれぞれ記されているが、手々知名の人たちは、この歌の作詞者については、「玉江柳曹翁と平瀬（旧姓門松）覚熊翁の共同作詞であるということ」を伝え聞いている。「と言っているのどこにこのことを付記しておく。
大正三年は、大正天皇御即位の年であり、それを機に新しい時代を生きていくための処世、教訓歌としての色彩が極めて強く感じられる。

月々節々 此処浴みる

7 でいかよ女童我が宿に 煙草何度むいしやくし
ら煙草一ふきに 散らさりてイ

8 煙草二ふきに なよていさみ 煙草三ふきに
妻心ななぬ裏座に込みらりてイ

9 金ぬ屏風む ひきまわち 枕二つに並び合
十日む二十日む 伴むなよていさみ

10 五才なる子も産しいじゃち 三才なる子も産しい
じゃち 五才なる子ぬ 言ぬ事や

11 三才なる子や守いがちやな ヨイヨイ童でイ守
がちやな 阿母飛び衣裳 吾な見ちやむ

12 ヤツ又御倉ぬ粟ぬ下 六ツ又御倉ぬ粟ぬ下
泣かなしユーりばどウ イヤーに呉りゆんど

いずれにしても処世、教訓歌としては傑作で、先人の慧眼に敬服するのみである。

(五) ミカル口説

1 国ぬ始りミカル国 川ぬ始りミカル川
天ぬ産子ぬ アムレシシ

2 あきしヨ飛び衣裳 うちはじてイ 松ぬ小枝
さぎなみてイ 御玉ぬ御杓し 水や波でイ

3 頭何度む 洗ゆたりやミカルシシメや楽な人
畑巡いなちきてイ 通い巡てイ

4 川や静に水や流る 頭髪に流りやい
取やい広じやりや 九尺あてイ

5 それからいよいよ取り巡てイ あきしヨ飛び衣
装取やい ぬがよ女童 此処浴みる

6 吾身や女童あやぶらむ 天ぬ産子ぬアムレシシ

13 スルメが居らん間に 倉聞きてイ あきしヨ飛び
衣裳 取やいでいかよ 産子今逃ぎら

14 五才なる子や腰に組でイ 三才なる子や脇に抱
庭ぬしくじく巡たりや 飛はりらん

15 五才なる子や地に立ていてイ 三才なる子や地に
座してイ 松の上にてイ 下見りや

16 五才なる子や慌てイ 三才なる子や手すぶてイ
阿母阿母とウ 泣ちユたむでイ

17 一羽あおじやりや白雲に 二羽あおじやりや中ぬ
雲 三羽あおじやりや 天昇てイ

18 七人ぬ兄弟ぬ 言ぬ事や ぬがしうみやによ
今なたるや やぶりミカルにひかさりてイ

19 しちぬ裏座に込みらりてイ 枕二つに並びあい
十日む二十日む 伴むなよていさみ

20 五才なる子^{イチチ}む産^{クアー}しいじやち 三才なる子^{ミイチ}む産^{クアー}しいじやち 七人ぬ兄弟^{シチニ}ぬ運命^{ウチ}ちきり

21 五才なる子^{イチチ}や祝女^{イハメ}になち 三才なる子^{ミイチ}やアムレ
なち 何日^{イチニ}む阿母^{アハハ}が運命^{ウチ}ちきり

22 夏^{ナチ}ぬ夏^{ナチ}降り 雨^{アミ}とウ思^ムんな 冬^{フユ}ぬ霜^{シムツ}立ち 雨^{アミ}とウ
思^ムんな 何日^{イチニ}む阿母^{アハハ}が涙^{ナミ}とウむーり

※この「ミカル口説」^{クドウチ}は、沖縄の民謡「上り口説」^{スライクドウチ}の曲で歌われている。

詞の解釈については、第九章口承文芸と芸能第二節 昔話の項で記述する「天人女房」を参照されたい。

四 村めぐりの歌

「村めぐりの歌」とは仮につけた名で、原本にも題名はなかった。

これは、明治百年記念刊行の「沖永良部島郷土史資料」

一、明治三十三年十一月

同校廃止により退職

俸給十二円

となつているから、この歌はそのころ作詞し、当時流行の「鉄道唱歌」の曲で歌われたものであろう。

その後

一、明治三十八年十二月二十六日

沖島戸長辞し 土持綱安戸長に任命する

一、明治四十一年四月

島嶼町村制施行により 初代和泊村長となる

となつているが、その人となり才氣縦横、円転潤達^{かつた}で村民の信頼を得ていたが、明治四十五年（大正元年）当時流行した腸チフスにかかり、避病舎で療養中一月四日行年四十一歳をもってついに病没した。

在任三年余りであったが、村民はその功績をたたえ、村葬の礼をもって葬儀を執行した。

この人を失ったことは、当時の和泊村にとってはまことに大きな損失であった。

国学院在学中は、文学殊に歌道に秀で、在京時代は、後の明治文壇の巨星田山花袋、民俗学の大家柳田国男等と親交のあったことはよく知られている。

の資料を探し求めているうち、町田実美先生が、串木野市在住の土持六男氏宅で発見し、書写してきたものである。原本に腐食、欠損の個所があつて（一〜六までは、当時の生徒で古里の重村窪栄翁より聞き書したもの）全文知ることができないのはまことに惜しいことであるけれども、明治末ごろの村々（字々）の様子を知る一つの郷土史料としての価値のあることを見のがしてはならない。

作者、土持綱安は、政照の二男でつとに国学院に学び帰島されていたと伝え聞いているが、和泊小学校に保管されている履歴書によれ

鹿児島県平民 土持 綱安

一、明治二十九年五月十三日

沖永良部高等小学校授業雇 俸給六円

一、明治三十年六月二十一日

沖縄県尋常中学校へ転任

鹿児島県士族 土持 綱安

一、明治三十二年二月

沖永良部尋常高等小学校奉職 俸給十円

綱安が柳田国男に送った

住みなれてあればこそ 綿津見の

離れ小島の 秋の夕暮れ

の詠歌に対し、柳田国男がこれをしのび、沖永良部渡島を思い立ち鹿児島で乗船したが、悪天候のため山川港に数日避難滞留したので沖永良部行をあきらめ

山川の五百重八十隈 越えくれど

なおはるかなり 君が住む島

と返歌を送って引き返したことも知られている。（この歌碑は、土持政照生誕の地に建立されている。）

また、田山花袋著「日本一周」の中の「鹿児島紀行」に綱安のことが書かれている。

村めぐりの歌

1 空と波とのけじめなき 大海原をはるばると
前に控えし湾頭に 眺めも清き和泊や

- 2 波ぎわ近き奥崎に 石垣高い御社は
 殿島神社にて いちき島姫まつりたる
- 3 宮の庭より眺むれば 和泊湾の風景は
 地図をひろげし如くにて 只一目の下にあり
- 4 国頭岬にま帆かた帆 かくるる船にほのぼのと
 浅瀬の潮の朝霧も 思いやられて面白や
- 5 貝を拾いて磯つたい 南へ行けば湧きいずる
 流れも清き石川の 水汲む乙女絶え間なく
- 6 川の上なる南原に 高石ベイの内広く
 坪数二百に余りたる 和泊尋常小学校
- 7 僅かに人家を隔てつつ 警察分署と相對し
 一光射し込む南原の 果てに放つも面白し
- 8 北に輪郭目を奪う 大建築はこれぞなき
- 9 小路をおきて北の方 戸長役場に続きたる
 社倉の跡は大島の 区裁判所の出張所
- 10 大路隔てて新築の 和泊郵便電信の
 局もおかれて世の人の 便利の程幾はくぞ
- 11 大路を前に売店は いらかならべて数多く
 通り賑ふ人数に 店の繁昌も知られたり
- 12 汽笛一声新橋と 鉄道唱歌の声高く
 賑ふ通り北に向き 謡ひて行けば村はづれ
- 13 明治維新の元勳と 世に謡われし西郷公
 配所の月にかこちたる 牢屋の跡はこなるぞ
- 14 公が藩主に罪を得て かかる孤島に呻吟し
 給ひし年はいつなるか 文久二年の秋のころ
- 15 年は三十六歳の 時より三十八歳の
 元治元年の春までは 三年の間なりしとか
- 16 維新の大業成就せし 公の雄姿はあわれこの
 牢屋の窓にさし入りし 月の影にや養ひし
- 17 記念の石碑ここに建て 朝な夕なにいや高き
 公の高徳仰がんも 近きにあるこそ樂しけれ
- 18 昔語りて下りゆく 浜に一筋流れたる
 川は和泊手々知名 村と村との境なり
- 19 この水源は奥川とて 灌漑多く水清く
 絶えぬ流れは十町余 末は海にぞ入りにける
- 20 名所の一にぞ数えらる この水上は明治橋
 心のこれど彼方なる 兼久の原に出でにける
- 21 電信柱の真一文字 行けば程なく吉美名に
 建てる家こそ電線の 陸揚所と知られたれ
- 22 忘るな海底電信を はじめて揚げし三十年
 忘るなこれも征清の 役に勝ちたる賜ぞ
- 23 程なく来たる喜美留村 戸数七十余りたる
 村の見物は暗川の 水汲む様ぞ難儀なる
- 24 笠石の音巖おもしろく 眺めて登る坂道を
 行けば程なく国頭の はやウソ山は迎えたり
- 25 村のこなたの高原に 高く突き建つ一棟は
 生徒二百に余りたる 国頭尋常小学校ぞ
- 26 しばらくここに安らいで ぶりさけ見れば徳之島
 霞のひまにあらわれて 宛然画にぞ似たりけり
- 27 西に見ゆるは半崎の 続く飛瀬は黒瀬とて
 漁舟借りうけ漕ぎ行けば 愉快に一日遊ぶべし
- 28 此処の沖なる島島は 沖縄県の所轄にて

- その頂きに夏ならば 硫黄の煙見ゆるべし
- 29 永良部・鳥島・徳之島 これの三島もとにして
仮に一線引くならば 三角形や作るべし
- 30 眺望もここに尽きたれば 一同村へと下りゆく
戸数二百に余りたる 和泊に次ぐ大村ぞ
- 31 村の暗川をはじめとし 全島一なる水附の
池の周囲は六町余 その外見物いと多し
- 32 東の浦は美瀬の浜 名さえゆかしく焚く塩の
煙は空に立ちそいて 雲と消えいくおもしろさ
- 33 北は断崖絶壁の 浦の巖にくだきつつ
飛び立つ波は八丈余 国頭噴潮の一奇観
- 34 此処より左海岸の 畑道行けば遠近に
麦生の雲雀絶間なく 鳴きかわしつつ興深し
- 41 急げば池堂溜池も 程なく過ぎて中村の
池の上にて我が道は 伊延街道に出会いたり
- 42 これより道を右にとり 並木の松に添い行けば
平たき道を十町余 伊延港にいたるべし
- 43 道の下なる天神の 山を左に下りゆき
道真公を祭りたる 菅原神社に詣でたり
- 44 おもいおもいに菅公の 延嘉の昔語りつつ
山に登りてもとの道 南西へと進み行く
- 45 行手の馬手に全島の 郷社と崇む天孫の
ににぎの尊を祀りたる 高千穂神社峯高し
- 46 これより北に畦布とて 戸数七十の村あれど
隔つる山の木立にて 見えぬぞいとど口惜しき
- 47 此の道西へ一文字に 行かば根折に出すべきを
左の畑路横ぎりて 和村赤平に出てにけり
- 48 ここより東村内の アンチモニーの採掘を
- 35 次に来れる西原の 村の戸数は六十余
海岸近き村なれば 漁獲の幸いと多し
- 36 遠く隔てぬ村なれば 喜美留国頭西原と
過ぎゆくままに変わりゆく 村の言葉の面白や
- 37 西原いでて坂道を 登りつめたる松原は
ここぞ名に負う琴平の 琴平神社の境内ぞ
- 38 社に鎮座ましますは 大物主の神にして
正月九月の十日には 参詣織るが如くなり
- 39 松原越に西の方 見ゆる家居はどこならん
戸数凡そ五十余 出花の村とはそこならん
- 40 後に西原右に出花 左はるかに和泊の
沖の釣舟数えつつ 並木の松のかけ伝い
- 49 急げば此処は根折前 弓手の村は根皿とて
今は根折と合村の 戸数六十に余りたり
- 50 喘ぎ喘ぎて登りゆく 坂は凡そ三、四丁
はるかに見えし越山の 麓に早も来たりけり
- 51 麓を右に新道を 息せき下る坂道の
右に湧き出る真清水は 旅路の渴を医ひるなり
- 52 道なる店に一息 これより頂上よじ登り
我が健脚試さんと 用意とりどり勇ましき
- 53 岩根たどりて頂に 登りつむればあなうれし
我が来し方も行く末も 手にとる如く見ゆるかし
- 54 戸数四十の瀬名村は 右手に見えて一筋の
川を隔てて永嶺の 村に間近くつづきたり

55 永嶺村は此処カシロ彼処
戸数六十に程近く

人家まばらに見えたれど
瀬名より遙かまさりたり

56 これの浦なる根喜名の
沖にただよふ釣舟は

泊は波も静かにて
浮かぶ木の葉にさも似たり

57 遙か西には沖泊
国頭崎と相對し

続く岬は田皆崎
一大湾作りたり

58 知名地の村の間近きは
上につづくは下城

人家まばらの上城
田皆分校も見ゆるなり

59 全島一の大山の
平川村の上下に

東に続く村々は
芦清良屋者余多なり

60 赤嶺久志檢両村は
此上よりぞ平川の

殊に間近くあらわれて
学校の棟は見え渡る

61 南の方に与論島
本地や伊平の島を越え

手にとる如く沖繩の
ながむる海の勇ましや

68 村のこなたの学校に

暫し我等は立寄りて

67 後蘭の村を後に見て
上の松原越えゆけば

程なく登る坂道の
城上原ここなるぞ

66 百町近き後蘭田は
なびく早苗の青々と

いづこも田植皆すみて
果なき色の面白や

遊ぶ生徒の数問えば
やがて二百に充つとかや

69 戸数は二百に充たざるも
東の方は内城

村の東西いと長く
三つに村は分れたり

78 70
欠損

79 彼処の畑にひるがえる
農は御国の本となる

旗は何処の農会ぞ
歌える声も聞こゆなり

80 運谷山を右に見て
皆川村に立ち入れば

農会組織の嚆矢なる
戸数七十に余りたり

81 南に隣る古里は
戸数六十に満たねども

僅か一町を隔てつつ
立てる煙は豊なり

(おわり)